

マンスリー・ヘルシートピックスのコーナーをリニューアルしました！ここでは、掲載月にこだわらずに、私達が“お知らせしたい事・話題のトピック”などを紹介しています。日比谷診療所・女性医療スタッフ（薬剤師・看護師・歯科衛生士）が、交替での投稿となります。12月は、歯科衛生士による投稿です。

言語聴覚士(ST)という職業をご存知ですか？

皆さんは、言語聴覚士（**Speech Language Hearing Therapist** : 以下 **ST**）という職業をご存知ですか？STは、医療従事者の一員であり、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、視能訓練士(ORT)と共に、リハビリテーション専門職と称されるうちの一職種です。STは、**聞く・話す・食べる**のスペシャリストですが、同じ口腔を扱う医療従事者と、どのように棲み分けしているのでしょうか？今回は、その違いなど、STの専門性、および歯科との連携などをお伝えします。

言語聴覚士の業務とは？

STは、新しい国家資格で、1999年に誕生しました。現在、アメリカのSTは、約15万5千人居るのに対して、日本は、約2万5千人と圧倒的に少ない数となっています。現在、言葉に対して何らかの障害を持つ人は、日本に約650万人もいるといわれている中、新しい資格でもあることから、ST数の少なさが際立ちます。ゆえに今後、益々、活躍の場が広がるのではないのでしょうか。

STは、**言葉・聞こえ・認知・嚥下(飲み込むこと)**などに問題がある方々に対して、評価・訓練・指導などを行ないます。これにより、ST-対象者が、思いを伝え合い、対象者に生きる喜びが持てるように専門的立場から支援する職業です。具体的には、脳血管疾患などが原因で発症する、失語症・聴覚障害・言葉の発達の遅れ・声や発声の障害に対し、検査によってその程度を判定し、医師の診断のもと、訓練のプランを作成します。その上で、発声のための筋力トレーニング、言葉を引き出すための訓練（カードやプリントを使用）、言葉の発達が遅れている子どもへの言語発達促進援助や、言語指導などを行い、コミュニケーション能力の改善を図ります。また、食べ物をうまく飲み込めない嚥下障害の訓練や、患者さんのハンディキャップを軽減する為の家族に対する助言・指導なども行ないます。

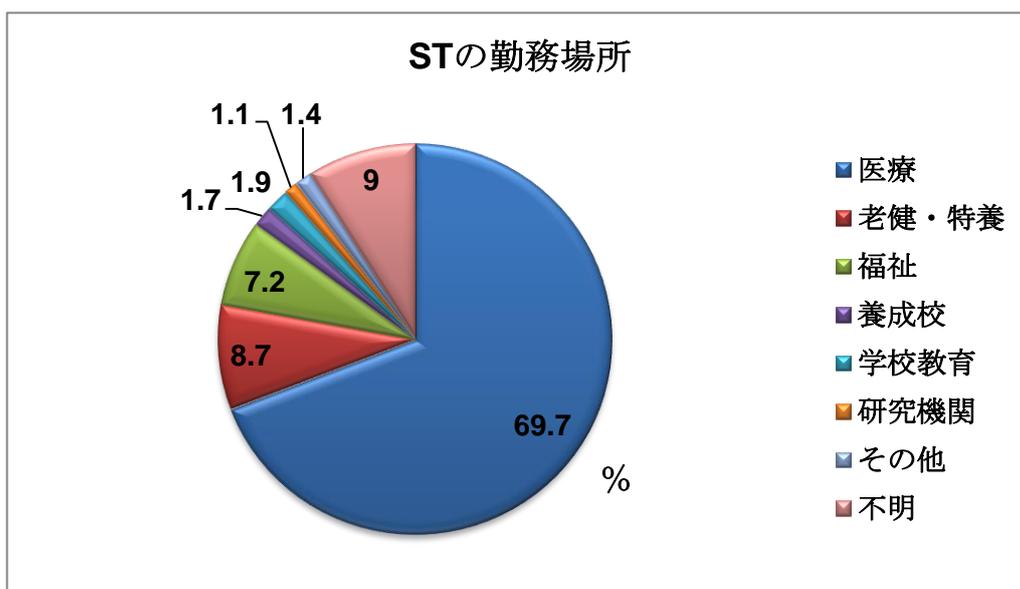
*参考：<http://www.iuhw.ac.jp/gakubu/genqo/slht.html>

以下の表で、STの対応業務をイメージしてみましょう。

表：言語聴覚士の対応業務

言語障害	音声障害	嚥下障害
<ul style="list-style-type: none"> ● うまく話せない ● 話が理解できない ● 文字が読めない 	<ul style="list-style-type: none"> ● 声がかすれる ● 大きな声が出ない ● 咽頭がんで声帯を失った 	<ul style="list-style-type: none"> ● 嚙めない ● 飲み込めない

STの主な勤務場所は、病院勤務が約70%を占めています。急性期・療養に比べて、回復期の方に多く携わっています。また、近年では、在宅訪問STも増加しているようです（図参照）。



STが診る口腔の機能とは

同じ口腔を扱う職種でありながら、STと歯科では、観点が違うようです。STは、主に**構音機能（しゃべる）**と**摂食嚥下機能（食べる）**を診ています。

1. 構音機能の障害

構音機能に障害（構音障害）があると、言語障害・音声障害が起こります。これは、大脳皮質の運動中枢から末梢の筋にいたるまでの病変による発語の障害です。

2. 摂食嚥下機能の障害

摂食嚥下機能の障害は、食物が認知され口腔→咽頭→食道を経て胃に至るまでの何処かに障害があることをいいます。歯科医療の分野は、硬組織（歯質）、および歯周組織（歯肉・歯槽骨）、粘膜などを対象にしていますが、超高齢社会を迎えた現在、訪問診療の機会も増え、摂食嚥下まで範囲を広げて、“**食べる**”にも多く関わっています。近年、歯科医療の分野でも積極的に摂食嚥下の教育が行なわれています。歯科医療とSTの連携が密になったのです（後述）。



3. STが行なうリハビリテーション

STは、主に機能訓練と代償手段を用いた訓練を行います。機能訓練は、舌・口唇・顔面・頸部の筋力・可動域の改善を行ないます。代償手段として、上手に話す方法、上手に嚥下する方法があります。常に新しい方法の学習を模索し支援しています。

STと歯科の連携

超高齢社会を迎えた我が国では、年齢と健康寿命は必ずしも比例していません。むしろ日本人の死因ワースト4（悪性腫瘍・心疾患・肺炎・脳血管疾患）からも分かるように、いずれの疾患も長期に闘病する可能性が大きいものです。入院生活が長くなり、寝たきりの期間も長くなると、**聞く・話す・食べる**に関しても様々な障害が出ることでしょう。これらの中で、歯科とは、話す・食べるの項目と、それらの器官である口腔が共通しています。食欲がある・何でも食べられる・飲み込めるには、歯と歯周組織が健康でなければなりません。具体的に、痛い歯が無くて、どのような食物も咀嚼できる、咀嚼する歯を支える歯肉・歯槽骨が丈夫であることです。そして、飲食物を上手に飲み込めて、咽頭から食道を経て胃に送る（飲み込める）一連の行為が、STと歯科が連携して目指すゴールとなります。STと歯科の連携場所は、病院や施設が多いのですが、昨今では、多職種がチームを組んで個々の患者さんに栄養サポートを行なうシーンも多くなりました。

NST（Nutrition Support Team：栄養サポートチーム）について



NSTとは、職種の違いを越え、**栄養サポート**を行なう多職種チームです。栄養サポートとは、基本的医療の1つである栄養管理を、個々の症例や各疾患治療に応じて、患者さんに最もふさわしい方法で、栄養状態を良好に保つことを目的としています。例えば、栄養状態が不良であると、回復に時間を要し、手術後に感染症や合併症を起こす可能性があります。**NST**のメンバーは、医師・看護師・薬剤師・歯科医師・歯科衛生士・管理栄養士・臨床検査技師に加えて、理学療法士・作業療法士・視能訓練士・言語聴覚士などの多職種に及んでいます。

NSTは、1970年代にアメリカに誕生しました。**中心静脈栄養（高カロリー輸液）**の開発普及から世界各地に広がり、日本の開始は、1990年後半とされています。患者の早期回復の他に、治療費の削減・病院運営のコストの軽減にも効果があるといわれています。中心静脈栄養の問題点として、腸を使わない為、腸内細菌叢のバランスが崩れて免疫力が低下します。本来は、経口摂取がベストですが、様々な理由により摂食嚥下が

困難な場合は、人工的水分栄養補給法（胃瘻^{いろいろ}）の実施となります。口から食べることは、インスリンの分泌も促し、また嚙むという行為は、運動機能の一番の基本でもあり、認知症予防にも繋がります。口から食べられるようになることが、回復を見る上でのバロメーターになります。

おわりに

今回は、同じ口腔を診る職種として、言語聴覚士にスポットを当ててみました。**ST**は、歴史も浅い為、馴染みが薄いと思われそうですが、超高齢社会を背景に、今後も**ST**の活躍が期待されます。また、話は、**NST**にも及びましたが、患者さんの生活の質（**QOL**）を向上させる為に、どの職種も掛け替えの無いものであると思います。

